十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉛2222
©十勝毎日新聞社 1988

進む宇宙開発
スペースポート調査団同行記 ……4

極超音速飛行会議

道の基地構想紹介

出席者、強い関心を示す

世界に初めて北海道の宇宙基地構想を紹介―。「この〝大樹構想〟に研究者たちはどんな反応を示すだろうか」スペースポートの視察とともに調査団のもう一つの目的である極超音速飛行国際会議へ参加するため搭乗した米国北部の穀倉地帯、ノースダコタ州グランド・フォークスへ向かう飛行機は世界初の国際会議への出席者で満席。専門家たちがお互いの研究について話し合うのを聞きながら一人わくわくしながらそんなことを考えていた。

☆――

北海道の大学連想

二十一世紀極超音速飛行国際会議。スペースプレーンの開発に対する各国の研究について情報を交換、大気圏の環境破壊や騒音の問題で米国な

構想のパンフレットを手渡す大谷氏（右）

北海道など日本のスペースポートの構想が発表された分科会

どで一時、ストップしたこの開発を盛り上げる必要があると、ノースダコタ大学航空宇宙学科デビッド・C・ウェッブ教授の呼び掛けで初めて実現した。

これまで航空機、宇宙機につては別々に会議が開かれていたが、スペースプレーンなど航空、宇宙両機にまたがる技術、設備、環境などについて検討を重ねる会議だけに意義深い。スペースプレーンの離発着場を目指す十勝・大樹町にとってもその開発動向が気になるところだ。

☆――

地図で大樹町確認

分科会の二番目の発表者として日本マクロエンジニアリング学会会員で、清水建設の松本信二建設技術研究部長が壇上に。「航空宇宙センターを誘致する地域の期待」と題して名乗りを上げる北海道、岩手、愛知、鹿児島の構想を発表した。北海道がまず最初に紹介された。「十勝の大樹町に広大な二万㌶の土地が基地として指定されており、スペースプレーンの離発着に必要な一万㍍の滑走路の建設も可能」と六枚のスライドを使って北海道と十勝の地理的位置や基地のレイアウトの青写真を示しながら説明した。

発表を聴く出席者も手元のパンフレットを見比べながら真剣な表情。「十勝に基地を造った場合、太平洋岸の漁業補償の問題は大丈夫か」など、質問は道の構想に集中、関心の高さを感じた。

「北海道からきたのかい。将来の日本のスペースポートから来たんだね」と片目をつぶって声をかけてくれたのは発表の翌日会った国際宇宙大学事務局のロバート・D・リチャーズ氏。また、会議の期間中、米企業の代表らが大谷氏の所に駆け寄っては大樹町の位置を確認するため地図を書かせているのを何度も目撃、その度に発表の影響の大きさを感じた。

☆――

誘致に心強い援軍

「宇宙基地構想の紹介で日本がトータルで宇宙に関する諸活動をしているのを理解してもらえた。海外の専門家に投げかけ、色々な意見を聞くことで、基地構想を一歩進めていきたいし、それなりの反応もあった」と発表者の松本氏。大学や米企業のロックウェル社などから「北海道構想についての詳しい資料を送ってほしい」「大樹町の予定地を見てみたい」との申し出が十数件。予想以上の反響だった。

「日本のスペースポートを北海道が誘致していることを専門家に知ってもらえたのは収穫。スペースポートには狭いのではという意見も出ると思ったが、そういう声もなく、一万㍍の滑走路など全構想を現実的に受け止めてもらえた」「こう声を弾ませる大谷氏と私は「スペースポート誘致を目指す大樹町にとって心強い援軍を得たね」と目を見合わせた。（近藤 政晴記者）

（つづく）

極超音速旅客機

開発のコンコルドなど超音速旅客機（SST）よりも速くかつ騒音の少ない機で、現在、開発段階。米国では一九八六年一月、マッハ5以上、二百―五百人乗りのNASP（米国版スペースプレーン）の開発構想を発表。NASAの技術を使って世界中を二時間半の距離（成田―ニューヨーク二時間）に縮めようとしている。二十一世紀の就航を目指している。